

歴史認識研究会

10月25日

儒教の精神こそが 日中問題解決への鍵

同志社大学専任フェロー

大阪大学名誉教授 加地 伸行 氏

歴史認識研究会（座長 森下俊三・小嶋淳司両代表幹事）は、同志社大学専任フェロー、大阪大学名誉教授 加地伸行氏を招き、「日中関係の過去と現在、将来展望～歴史的視点から～」と題して講演会を開催した。以下要旨。

根本的な分析の重要性

学者や専門家に必要なことは、物事を考える時には根本的な分析を徹底的にすべき点である。例えば、中国経済について、人民元高の是正等の諸問題が議論されているが、そもそも人民元の累計発行高がいくらかを正確に把握し、またその根拠を説明できる人はいない。同様に、中国の古典や歴史を真に理解せずに、現在の中国を論ずるのは妥当でないと考える。

歴史認識とは何か？

先般の安倍首相訪中によって、中国の靖国問題は自虐的日本人が言うような中国人の心の問題ではなくて、政

治的カードに過ぎなかったことが明白となった。歴史認識とは、歴史上の出来事をきちんと把握し、その意味を明らかにすることだが、客観的な出来事に解釈や意味を加えたものが歴史的事実となる為、事実に解釈の共通性を求めるのは不可能である。刑事裁判を例にすると、検察側は結果主義、弁護側は動機主義で主張する。日中問題も同様で、客観的な出来事に共通認識を持つことはできても、その解釈に共通性を持つことはできない。

日中・日韓問題解決の鍵

真に未来の平和・友好を求めるならば、ある時点の一定条件下で過去についてはお互いに不満はあっても、それは問わない。それが講和・平和条約の精神である。日中平和友好条約・日韓基本条約にもこの精神はあったはずで、日本はこのことを主張し、条約締結以降のことを政治・外交の論点とすべきである。また、東北アジア圏には儒教文化圏という宿命的なつながりがある。儒教の精神とは、「祖先を敬い、祖先と自分の間に生命が連続していることを意識する」ことである。歴史認識を超えるものとしてこの精神が共通の認識・感性となり、問題解決の鍵となるのではないか。

